

The Red Badge of Courage 再考

伏 見 茂
(帯広畜産大学英米文学研究室)

1978年8月30日受理

The Reconsideration of *The Red Badge of Courage*

By

Shigeru FUSHIMI

1

Stephen Crane (1871-1900) 自身述べているように¹⁾, *The Red Badge of Courage* の草稿は, 21 歳の前半過ぎに書き始められ, 22 歳にして完成したもので, 1893 年の夏の間, 兄の Edmund の家でこの小説のすべて, またはほとんどが書き直されたと言われている。その後, W. D. Howells に読まれ, Crane の親友 Edward Marshall の眼にもとまり, Marshall の助言, つまり Irving Bacheller に原稿を持って行くようにという助言によって, この作品が公表されるきっかけをつかむことになる。多分 Bacheller は, これを 1894 年の 11 月に読んだことが想像され, その後直ちに, それを彼の syndicate に買ったと言われる。ここで, 新聞の読み物として署名入りで連載されることになる。したがって, 1895 年 10 月, *The Red Badge of Courage* が単行本として出版された時には, The Philadelphia Press に載った西部取材記事と The New York Press に載った 12 篇の読み物とあいまって, 彼の名前は Philadelphia と New York では, 多くの人達に知られるようになっていた。この作品を単行本の形で出版させる交渉は, この新聞翻案を 1894 年 12 月 20 日に Appleton 社の Ripley Hitchcock に送った時に始まり, Appleton 社では 1895 年 2 月まで出版の決定を遅らせたけれども, この原稿を受諾している。1 ドルで売られた初版本の売れ行きは, 地元のアメリカではそれほど芳しいものではなかった。これは The New York Tribune に酷評されたことでも分かるように, ニューヨークにおける評判は *Maggie* の場合と似ていた。Hitchcock の言うように, ニューヨークでは余り売れなかったので多くは西部へ送られたことを考えると, 次の彼自身の言葉は頷ける。

I hear the damned book ("The Red Badge of Courage") is doing very well in England. In the meantime I am plodding along. I have finished my new novel ...

“The Third Violet”... and sent it to Appleton and Co., as per request, but I’ve an idea it won’t be accepted. It’s pretty rotten work. I used myself up in the accursed “Red Badge”²³.

しかしイギリスでの評判は誠に好評で、批評家の眼にとまるところとなったところから、多くの読者の眼を惹いた。これに力を得て、アメリカでも評判をよび、その後ベスト・セラーの位置を獲得するに至る。これは、アメリカで1年のうちに14版を重ねたことによっても、頷けるであろう。このようにして、1894年 Crane は24歳の直後に、無名から国際的な名声を勝ち得ることになる。ところで、このように若干22歳にして草稿を完成させ、2年間の修正を経たとしても、24歳にして国際的な名声を勝ち得た *The Red Badge of Courage* なる作品は、それなりに批評に耐えるだけの理由があったはずである。

この作品は、よくソースについて多々論議されているが、この辺に好評の鍵がかくされているのではないか。

..... When one looked for sources, one thought at once of Tolstoy; but, though it was clear that Tolstoy had exerted a powerful influence upon the conception, if not the actual writing, of the book, there still remained something entirely original and novel²⁴.

上の H. G. Wells の言葉を読めば、Tolstoy は彼に大きな影響を与えたとする見方が一般であることが分かるが、この場合むしろこの作品における作者自身の独創性と新奇性を主張しているところに注目しなければならない。他に Zola や Standhal を読み、研究したとする意見も見られるし、またこの論議がリアリズムやアメリカ的ソースに向けられる時は、必ず Bierce や De Forest の名があげられる。また作者は南北戦争の体験がなかったので、自己の体験では書くことが出来なかったことを知れば、南北戦争の文献を読み、研究したという事実も、この作品のソースとしてあげられよう。しかし上の H. G. Wells の言葉同様、「このようなソースと影響の研究は、この作品の重大な点を見失っている」で始まる Marston LaFrance の次の言葉は、真をついたものと思われる。

The Red Badge, as will be shown, is neither naturalism nor about the Civil War; hence, there was absolutely no need for Crane’s consulting any of the authors or works mentioned above. Crane himself apparently did not like Zola (Beer, *Crane*, 97-93, 147), and there is no convincing evidence that he had read *Sevastopol*; the other ‘sources’ are offered as mere possibilities even by their proponents. He admitted that he had studied *Battles and Leaders of the Civil War* (*Letters*, 17), and that he had, without much success, questioned veterans about their feelings in combat. There is no reason at all to assume other literary sources. Hungerford has shown that the factual framework behind the setting of the novel is the battle

of Chancellorsville, and he bases his investigation securely upon Crane's naming this battle in "The Veteran".⁴⁾

このように、この作品は naturalism でもなければ、南北戦争についての小説でもない主張する。その背景として、作者自身 Zola を好まなかったということ、また *Sevastopol* を読んだとする確証は何一つないことをあげている。一方作者は *Battles and Leaders of the Civil War* を研究したことは認め、また南北戦争中の兵士達の感情について老兵に尋ねたことは認めるにしても、*The Red Badge* の背景としての戦闘は、Chancellorsville の闘いであるとする Hungerford の言葉を頼りに、南北戦争そのものでないことを立証しようとする。

Lafrance に依れば、Colvert の言葉を引用しながら⁵⁾、*The Red Badge* を書くのに、戦争を全く体験しなかった彼が、どのように戦争について学んだかということではなくて、Henry Fleming の心理を構築するために、極めて短時間に、この若い作家が人生についての十分な知識をどのように消化したかという問題の方が、むしろ不思議なことだと述べている。ここでも触れられている Fleming の心理の構築、いわばこの若い兵士の心理的な変化を通してみられる現実把握と困窮からの脱出に至る過程が、この作品のメイン・テーマであるとするれば、むしろこの作品のソースを、外的な影響の面から探ることよりも、作者自身の内的な体験の方を重要視する必要があるだろう。Hamlin Garland に依れば⁶⁾、Crane の精神は、その働きにおいて一般の人より遙かに潜在意識的であったことを指摘し、むしろ作者の内的な体験を、*The Red Badge* の執筆における重要な問題であるとしている。しかし彼自身こうした心的動向あるいは心的根源を十分に理解していたとは言えず、むしろ彼のペンは噴水のように奇異な語、イメージ、文章を迷り出させるのであり、彼は自己のベースから逸脱すればするほど、彼の孤独な心的傾向が、その力を弱めるのである。したがって彼の天才は孤独のそれであり、さびしい闇の世界のそれであることを指摘する。本質的には、彼には孤独な心的傾向があり、これが戦争小説と言われる *The Red Badge* を、戦争小説としての真価よりも、孤独な一兵士の心理的な変遷の物語としたと言えよう。

そう言えば、ここで1つのエピソードを思い出す。George Wyndham は Crane に対して、「普通の人より感覚的で、想像的な人間を目指すような作品を書くよう⁷⁾」推めたことである。*The Red Badge* は外的な影響による要因から生まれたものでなく、上の助言なども加わって、作者自身の孤独な心的傾向とあいまって、彼自身でなければ書けない獨創性を基調に結実したものと言えよう。したがって H. G. Wells の言うように⁸⁾、この作品は、戦争中の典型的な一兵士に関する主観的な研究の書であることを強調しなければならない。この意味では、彼は idealist である訳であり、危険と死を素材に一戦争であろうがなかろうが—この中で戦う一兵士のカメラ・アイとも言える心理的な正確な眼を通して、たった2日間の戦闘経験の中で、主人公が何を獲得したかが、この作品の主題となる。この作品の中には、動物的なイ

メジャリーが広汎にわたって使用されるとした研究や主人公 Fleming の状況に応じて異なる会話形態の相違の研究なども見られるが、以上の見方からすれば、これらはさほど重要なテーマではない訳である。私はこの小論の中で、主人公 Fleming に焦点を合わせて、彼の眼に映る環境が、彼の心にどのような影響を与えていったか、つまり作者 Crane の分身とも言える Fleming が、作者の思想とも言えるものを、どのように着実に自己のものにしていったかを探ってみたい。

2

まずこの作品の主人公 Henry Fleming の戦闘との関わりから始めなければならない。彼はこれまで、彼を脅かす無意味な血なまぐさい戦闘のことを思いつめてきた。彼の過去の経験から、戦場を crimson blotches と考えてきたし、加えて母の反対にもかかわらず、参戦への情熱と愛国心のゆえに、戦闘に参加することを決意するのである。

事実、現実の戦場に赴いてみて、彼は参戦前に戦場を crimson blotches と考えていただけに、ひどい恐怖に襲われる。彼の精神の葛藤の始まりである。すでにここで、戦場を逃れるべきか、いや決してそんなことはあってはならないとする自己との対決が見られる。ただ彼がこのように想起するのは、経験のない戦争に対する単なる想像的な破綻に過ぎないのだと自己弁護することによって、気を持ち直すのである。このような精神の危機にあって、彼の人生哲学は無益に等しいと感ずるほどである。

In his life he had taken certain things for granted, never challenging his belief in ultimate success, and bothering little about means and roads. But here he was confronted with a thing of moment. It had suddenly appeared to him that perhaps in a battle he might run. He was forced to admit that as far as war was concerned he knew nothing of himself⁹⁾.

今までは、彼は意志決定の場に遭遇したこともなければ、その手段なり道の選択に悩まされたことは一度もないだけに、今戦場における行動の決定に際して、彼は無に等しいことを悟らざるを得ない訳であり、彼の言葉を借りるならば、「彼は兵士として作られていない¹⁰⁾」ことを痛感させられる。

彼は行軍の途中あるキャンプ地で休憩した時、自己の苦悩をみじめに思い、自分の家で過ごした過去の様々の想い出にふけるのであり、牛をいじめたり、乳しぼり台を蹴飛ばしたりした時の方がいかに幸せであったかを述懐するあたりは、戦場にあっては無価値な自己を認識するだけである。この状況は参戦する前の連隊でのいわば一時の安息の時なのであり、この一兵士の眼に映る場面も、いわば戦場とは関りのない平和な一時のそれであることを考えておかなければならない。

この後に続く第3章では、現実には敵と相対することになるのであるが、彼の眼に映る場面

が、一転して緊張の場面と変わると同時に、それに対応する彼の心理的な反応も顕著にあらわれてくる。「人間は戦場では別人になることが教えられた¹¹⁾」と語っているところから、その状況に応じて、その中に置かれた一兵士の心理状態の変化に気付かない訳にはいかない。逆にこのように考えて、自己の精神の変化に一応の安堵感を意識することがあっても、再び焦躁感にかられ、遂に將軍の計画性に疑問を持つというような、安堵感と焦躁感の同時的な襲来に悩まされる。ここでは、彼の錯綜した心理状態を通して、自己の喪失をうかがわせる。

彼は敵に殺され、不安と焦躁につきまとわれなくなる方が幸せだと考えるようになるし、死についても、その意味するものは無意味であって、休息に外ならないと考えるようになる。すなわち自己、その世界を極限の芯まで裸かにすることによって、彼は無、つまり虚ろな眼の死体以上の無と化すことによって、単一性つまり孤独の中に立たねばならない。しかし彼は身を引いて、結果的には身をひるがえして直ぐに戦場の方向へと走り始めるのである。

第5章では敵と相対した時、彼の感覚は怒りと化し、追われる動物の激昂にも似るのであり、兵士達のすべてもただ無言のままに、感情を押し殺しさえするが、怒りが徐々に増大しつつ、若々しいバーバリックな歌となって表出される。彼らは聞きとれない声で何かを口ずさみ、あちこち移動し、勇気を鼓舞し合う。やがて戦場の砲弾の煙は消え去り、敵は三三五五に散っていく。彼の血管からは熱気が消えて、窒息でもしように思えるのであり、この時やっと今まで戦ってきた最悪の戦闘の事実を自覚する。ついに彼は身心共に休息を得た人間として、一時の喜びを意識するに至る。

このように、この作品における初日の Fleming の心理状態は、孤独感から生ずる無なる意識から、敵に対する怒り、つまり恍惚とも言える状態へと移行していく。この恍惚状態から、一時的な心の安息を学びとることが出来た。つまり死でさえも無意味だと感じさせた孤独の領域から、彼は一時的に脱出することが出来た。Fleming はこのような2つの精神状態の間を揺れ動く。前者の孤独な状態にあっては、自己中心的で、彼の誇りと極端な自意識に悩まされるのであり、彼の行動を正当化しようとする。彼の参戦の動機は、戦争に対する情熱と愛国心にあったはずであり、彼の母が戦場よりも農場の方が大事であることをいかに説得しても、彼の信念には抗しきれなかった。

She could calmly seat herself and with no apparent difficulty give him many hundreds of reasons why he was of vastly more importance on the farm than on the field of battle. She had certain ways of expression that told him that her statements on the subject came from a deep conviction. Moreover, on her side, was his belief that her ethical motive in the argument was impregnable¹²⁾.

母の彼に対する説得は「深い確信」から生まれたものであっても、彼の方ではこの言葉に耳を借すことが出来ず、母の失望をあえて退けて参戦したはずである。しかし彼は参戦して恐

怖に戦く時、「伝統と法律の力にがんじがなめにされた自己¹⁸⁾」を思い、「移動する箱¹⁴⁾」の中に閉じ込められたと感じた時、次のような想いがふと頭を掠めるのである。

As he perceived this fact it occurred to him that he had never wished to come to the war. He had not enlisted of his free will. He had been dragged by the merciless government. And now they were taking him out to be slaughtered¹⁵⁾.

彼は参戦したくなかったのであり、彼の自由意志からではなく、無慈悲な政府に引きづり出され、死に赴かされたのだと考える。このように単一性、つまり孤独の中に立つ時には、いかにも自己中心的であり、自己の行動の責任を他に転化することによって、自己を正当化しようとする。しかしもう一方の精神状態にあっては、彼は自己を忘れ、本能的に行動するか、その中で行動と役割を観察し解釈するかするのである。戦闘に参加する前では、孤独な自己中心的な自己を発見するが、一旦参戦すると自分が逃走していることに気付く。

…… he strenuously tried to think, but all he knew was that if he fell down those coming behind would tread upon him. All his faculties seemed to be needed to guide him over and past obstructions¹⁶⁾.

ここではまだ考えようとしてそれが出来ないし、それを好まない。けれども彼が戦場に近づくと、「ここで彼は突然好奇心の衝動を感じたように多くのものを忘れ¹⁷⁾」、一瞬自己を忘れる。その後で「彼はすべてのものを見ようとした¹⁸⁾」のである。彼はここで始めて恍惚状態から覚めて、現実を理解しようとする。戦場には戻らなかったが、その代わり彼は死者に出会う。「ここで彼は考える機会を持つ。彼は自己を疑い、自己の感覚を慎重に吟味する機会を持った¹⁹⁾」。彼の屈折した思考と想像が戻ってくるのである。

The cycle which Crane establishes reveals why Henry fails, and how he may succeed. He fails whenever he isolates himself, exaggerates his own importance, gives himself over to self-centered thought and imagination, and falls into romantic illusions. He succeeds when he forgets himself, becomes a part of the group, and sees things as they are. It is important to notice that success derives from curiosity as well as instinctive, animal behavior; the individual need not resign his humanity²⁰⁾.

上の Thomas M. Lorch の言葉は、Fleming のこうした2つの精神状態における相互作用を巧妙に言い当てている。彼は孤独な時は、いつも失敗するし、自己中心的で、想像力に身をゆだね、幻想に落ち入る危険性がある。しかし自己を忘れ、そのグループの一員となる時、あるがままに物を見ることが出来、成功する。上にも引用したように、彼の成功は「突然の好奇心の衝動」から生まれるのであり、また動物的なイメージの多用からも理解されるように、それは動物的、本能的な行動から生まれるのである。このように、入隊初日における Fleming の精神状態は、孤独と恍惚の相互作用によって、不安定な状態に終始していることが理

解される。

しかし上にも少し触れたように、戦場で死者に出会ってから、これを契機に考えることを学び、自己の不安定な感覚を吟味するようになってくる。こう見てくると、彼の精神に何らかの影響を与えたであろうと考えられるのは、死者との出会いであったように思われる。この作品の主題が、Fleming の心理の構築、つまり若い一兵士の心理的な変化による現実把握と困窮からの脱出に至る過程であるとすれば、この死者との出会いが、彼の精神の発展過程に重要な役割を果しているのではないだろうか。

3

第7章で味方が戦闘で勝利に終わったにもかかわらず、Fleming は逃走していたことに気づき、自戒の念にかられる。「前進、前進」という荒々しい声に面喰うのであり、味方の全滅が予想されたので逃走したことを自己弁護する。彼は自己を救うことに全力をあげたのであってみれば、当然彼は機会あるごとに、自分の連隊を救うことが彼の義務であったはずであったが、そうあるべきであったと述懐するのである。したがって彼は逃走の地からキャンプに戻る途中、焦躁感にかられる。途中、自然は「悲劇を嫌う婦人のようだ²³⁷⁾」と考えて、よく引用される次の場面によって、自己の正当性を弁護しようとする。

He threw a pine cone at a jovial squirrel, and he ran with chattering fear. High in a treetop he stopped, and, poking his head cautiously from behind a branch, looked down with an air of trepidation²³⁷⁾.

彼が松カサをリスに投げる時、逃げるリスの行為と彼自身の行為とを比較することによって、自己の憶病性を正当化しようとしていることは明白である。この後に続く文章で分るように、「自然には1つの法則がある。自然は彼に1つの啓示を与えてくれた²³⁸⁾」として、作者はこの一兵士の心理状態を説明しようとする。Mordecai and Erin Marcus によれば、この部分を「作者の意図は、ここでは少なくとも部分的には風刺的であるように思われる。そしてそれは、彼が猛烈さに対してよりも、憶病さに対して批判していることを示している²⁴⁰⁾」と解釈しているが、どうであろうか。確かに、これ以前の彼の精神状態は、愚かしい仲間に対する怒りを通して自己憐憫にかられるが、この自己の行為の正当化によって、むしろ再び道義的な人間の状態に戻ろうとする葛藤を示しているのではないだろうか。

This landscape gave him assurance. A fair field holding life. It was the religion of peace. It would die if its timid eyes were compelled to see blood²³⁹⁾.

確かに作者のアイロニーは感じられるが、この場面を Fleming の精神の発展過程における出発点と考えるならば、むしろ彼がこれを契機にどのような方向に進んでいくのかの方が、興味があるだろう。ここで指摘しておきたいことは、自然は彼に確信を与えたことであり、つまり生への生き方を暗示していることである。したがってここでは、逃走が生に連なる行為で

あったことを認めていることの方が、読みとして正しいのではなからうか。次に彼は「背の高いアーチ型の枝がチャペルを形造っている場所²⁶⁾」に来るのだが、ここで死者に出会う。

上で見た自然の愛、憐憫、信仰のようなイメージから一転して、残酷な死へと場面は転換する。この宗教的な暗示と死との二律背反的なパラレルは、作者のアイロニーを彷彿させるが、実はこれは作者の内的な真実と受け取れるし、むしろ宗教不信に徹した作者であってみれば、宗教性と死を直結することによって、この場合どちらかと言えば死の恐怖を暗示したものと解釈出来る。「彼は円柱のような木に背をもたげて坐っている死者に見られた²⁷⁾」し、この若者の見つめている眼は、「死んだ魚の腹のようなにぶい色に変っていた²⁸⁾」し、「背を向ければ、死体は飛び上って執拗に彼につきまとう²⁹⁾」のではないかと恐れるのである。

Lafrance によれば³⁰⁾、彼が死体に触れるという崇高なる示唆を受け取ることによって、自己の合法化は道義の死を意味するのである。それは自己の責任を否定するからだと言うのである。したがってこの死体は、Fleming の心の内部という森の中で、別の新しい道を探さなければならぬことを暗示しているだろう。

確かに第8章では、新しい道を探す手がかりを模索する。

He listened for a time. Then he began to run in the direction of the battle.

He saw that it was an ironical thing for him to be running thus toward that which he had been at such pains to avoid³¹⁾.

彼は戦場の方へ駆け出すことによって、今までの逃走への自己弁護から全く新しい方向、つまり彼にとってアイロニカルなものへと精神の転換をはかるのである。したがって、これは森から脱け出る Fleming の第一歩、つまり生への脱出と考えられる。したがって、この後に続く死体なり重傷を負った兵士達の叙述を、今少し詳細に跡づけてみる必要があるだろう。

In this place the youth felt that he was an invader. This forgotten part of the battle ground was owned by the dead men, and he hurried, in the vague apprehension that one of the swollen forms would rise and tell him to begone.

…… The wounded men were cursing, groaning, and wailing.

…… Another had the gray seal of death already upon his face³²⁾.

過去の戦場に足を踏み入れた時、そこは死者と負傷者に占領されていることを知る。そこは「忘れられた部分」と形容されているように、彼には場違いの場であることを知る。彼の認識の仕方を借りるならば、彼のような人間が足を踏み入れるような場所ではないのである。また彼は一人の「ぼろ服の兵士」に出会う。この兵士は頭から足先まで血と塵にまみれて、若者の側を足をひきづりながら歩いている。それでもこの男は、軍曹の説明を「熱心にしかも謙虚に³³⁾」聞いているのであり、「彼の細い姿態には畏怖の念と感嘆の表情³⁴⁾」が感じられるのである。またこの兵士は、頭に2つの傷を負い、片腕が折れた枝を思わせる重傷を負っていたこともつけ加えておかなければならない。少しあってこの兵士は、Fleming の側に寄って来て、

彼を友達にしようとする態度が見られる。彼の声は、「少女の声のようにやさしく³⁵⁾」、その眼は嘆願するような眼つきだと説明されている。このように唐突とも思える人間との出会いに、読者として奇異の感を免れないところを考えると、作者は、Fleming との精神的な関りにおいて、意識的にこの「ぼろ服の兵士」を創り出したものと言えよう。したがって今少しこの兵士を跡づけてみる必要がある。Fleming はこの兵士から見える最後部に後退したが、彼の周囲の兵士達はすべて負傷しており、彼だけが生身であることに罪意識を感じるのであり、だから身体を引き裂かれた兵士達が特に幸せであるとさえ思う。彼は「負傷、つまり赤い武勲章³⁶⁾」を受けたいと思うのである。彼のこのような衝動は、この時点では無謀な冒険に過ぎない。なぜなら、もし一時の衝動にかられた行動は、死をまねく以外に道はないからである。

再び彼の前に「ぼろ服の兵士」が現われる。今にも死にそうなの男は、Fleming に向かって「決して死ぬな」と言う。その上「もし俺が死ぬなら、連中のように死にたくない。それは滑稽の最たるものだ。俺はどっと倒れるだけだ³⁷⁾」。Fleming は自己の恥部を突き刺されるような言葉に耐えられなくなり、彼は「自己を見つめ、ぼろ服の兵士に憎悪と侮蔑の眼を向け³⁸⁾」、語気を強めて別れの言葉を投げつける。結局彼を見棄れることになる。

He now thought that he wished he was dead. He believed that he envied those men whose bodies lay strewn over the grass of the fields and on the fallen leaves of the forest.

The simple questions of the tattered man had been knife thrusts to him³⁹⁾.

Fleming はこの兵士が死んでくれればいと希うことによって、また今にも死にそうでありながら、謙虚であり、やさしく、Fleming に「決して死ぬな」と言ったこの兵士を完全に見棄てることによって、当然彼は深い罪意識を感じざるを得ない。したがって「ぼろ服の兵士」の与える強烈な印象は、決して彼の頭から去ることはないし、この兵士の単純な言葉も、彼を突き刺すナイフとしての強烈な痛みとなって残る。「ぼろ服の兵士」だけでなく、森の中に散在する死体すべてが、彼のエゴを叩きつぶすナイフとしての役割を果たしている。すなわち彼の罪意識を惹き起こすものとなっている。この章は特に「ぼろ服の兵士」との関係において、ナイフのイメージが強烈であり、この意味では、この兵士の存在が Fleming の精神に重大な影響を与えることが予想されるし、したがってかつて衝動的に「赤い武勲章」を受けたいと考えた彼が、真実のそれを受けようとする方向へと転換することが予想されるのである。

もう一つ Jim Conklin の死を考えてみなければならない。彼の死に至る客観描写は1ページにわたっており、Lafrance にグロテスクと言わしめるほど強烈な印象を与えている。作者 Crane は苦痛、残忍、愚鈍のような人生におけるある物に対する恐怖を示す時、このグロテスクなテクニクを多用する。このグロテスク性は相手の心に深く入り込んで、その中から何かを導き出す場合が多い。この何かを導き出すためには、生前の Conklin の生き方が、Fleming

に何らかの印象を与えていなければならない。Conklin はグループの一員であることの重要性を指摘する最初の人であり、Fleming の質問に、彼は「冷静に確信をもって⁴⁰⁾」答えるのである。また Wilson の烈しい抗議を、黙れと言って静めたり、また彼は「新しい環境や状況を非常な冷静さで受け止めた⁴¹⁾」人間でもある。

このような Conklin の冷静さに対して、Fleming は「耐えられない」のであり、短絡的に殺され、この苦しみに終止符を打ちたいと思うのである。死などは無に過ぎず、「Conklin のような男から自分の深い敏感な感覚を理解してもらうことを期待するのは無駄だ⁴²⁾」と考える。しかし Conklin が今にも死にそうであっても、「俺を放っといてくれ、俺に触れるな⁴³⁾」と繰り返すのであり、グロテスクな死に様を前にした Fleming は、Conklin の顔に「奇妙にも尊厳な威厳⁴⁴⁾」を感じとる。一方 Fleming の顔の表情は、「ゆがみ、彼の友達に想像していた苦悩をすべて表わすのである⁴⁵⁾」。そして彼はこの光景を目の当りにして、突然怒りがこみ上げ、戦場の方へと足を向ける。何か攻撃的な演説をふりかざすような姿勢で。確かに、彼は負傷兵を見て、彼等を羨ましく幸せと思ったし、それゆえに虚偽の赤い武勲章を手に入れようとした。しかし今死が彼の幻想を払拭し、それが真実の武勲章を獲得する動機となることが予想される。結局この死は、Fleming の知恵の始まりであろう。振り返って上の2つの場合を考えてみると、今にも死にそうな「ぼろ服の兵士」と Jim Conklin の場合における Fleming との関係では、いずれも彼は両者を見棄てたことに重大な過失を認めなければならない。これを契機に罪を感じ、見棄てた行為から生ずる自己嫌悪を償うために、彼は何かをしなければならぬ。今にも死にそうな男を見棄てたことは、彼の憶病性、利己主義、未熟という道を深く入り込んだことになるのであり、したがって彼は再び新しい道を探さなければならない。見棄てた直後に連隊に戻ろうとした意欲は、この背景との関連において意味をなしてくる。

4

第11章では、戦闘のざわめきが益々激しくなるところから始まっている。このような状況は、彼の今までの精神的な罪意識を払拭するのに役立った。指揮官の命令に重要な意味を感じることが出来れば出来るほど、この光景を眼にする Fleming の心に、再び悲哀が重く去来する。彼はこの行進が偉大なものと感じ、同行したいという願望にむせび泣くのである。彼は自己の中に適当な呪いの言葉を探り、それが何であろうと、自己に責任があることを悟る。この堂々たる行進を目撃することは、彼にとっては激しい戦闘以上にすばらしいもののように思われる。この英雄達が、死の陰うつな道へと急いでいることを、どう受け止めているのだろうか。こんなことを考えていると、彼は自己の生命を彼等の一人の生命と取り換えたいと思うほど羨望がつのる。また眼前で兵士が殺される光景を想像すると、自己の死体の「荘厳なペーソス⁴⁶⁾」を思う。兵士の足音、鋭い声、武器のかち合う音なども、彼の心を前線にかり立て

る。そんな彼に「憶病な愚か者⁴⁷⁾」とする自己嫌悪が見られるが、以前の Fleming とは違って、このような意識の後で直ぐに勝利への渴望を感じさせるし、また人間は前進さえしていれば、このおぼつかない足取りも遂には人生の成功へとたどり着くことが出来ると考える。確かに、前後して死の月桂冠は無に等しいとか、想像上の華やかな勝利の衣もごまかしであるといった彼の錯綜した心理状態をのぞかせるが、結局は自己が他の兵士のようにでないことに哀れを感じている。

He said that he was the most unutterably selfish man in existence. His mind pictured the soldiers who would place their defiant bodies before the spear of the yelling battle fiend, and as he saw their dripping corpses on an imagined field, he said that he was their murderer⁴⁸⁾.

彼は余りにも利己的であったし、負傷者や死者に対して何の力も借し得なかった自己を、結局殺人者であると看做す自戒が見られる。しかしこのような反復的な自己嫌悪の後で、「巨大な青白い武器⁴⁹⁾」に打勝てる自信をのぞかせるし、努力こそ勝利の女神であると自問し、再び戦場へ向かうのである。戦闘に参加するため彼は連隊を求めて森を引き返す途中、奪われたライフルで頭を一撃され、負傷する。Lafrance によれば⁵⁰⁾、この傷は、彼を連隊の位置に連れ戻す手段としてのみ使われている。すなわちこれによって、彼が探していた道、正確には芽生えた欲望が可能ならしめられ、しかもこの傷は外界の嘲りから彼を守る役割を果していると考えられる。負傷が彼を連隊に連れ戻す役割を果していると同様、この場面では一人の陽気な兵士も同じ役割を果している。前に「ぼろ服の兵士」が Fleming に戦闘への意欲をかり立てたと同様、陽気な兵士も同様の役割を果しているという意味である。この兵士は自己のなすべきことを認識しているし、楽天的でなく、陽気に最善を尽そうとする。陽気な兵士の献身的な親切によって、彼は連隊に戻り、介抱され、肉体的にも精神的にも疲れ果て、友の毛布にくるまってベッドに入る。作者は前に「ぼろ服の兵士」を作意的に設定したように、ここでも陽気な兵士の登場によって、Fleming に勇気を与えていることが分かる。奇妙なことに、Fleming は「ぼろ服の兵士」を見棄てる破目になったことを思えば、この陽気な兵士の親切な行為は、むしろ彼の以前の利己的な行為に対して自戒を促すものと受け取れよう。

第14章では、目覚めてから彼の頭はメロンのように重く、気分が悪かった。変わったことには、彼の友人達はとても親切にしてくれたことであり、彼の方も些細なことに腹を立てなくなったことであり、怒鳴ることもなくなったことである。

He had been used to regarding his comrade as a blatant child with an audacity grown from his inexperience, thoughtless, headstrong, jealous, and filled with a tinsel courage⁵¹⁾.

彼は仲間を厚顔無恥なガキと考え、安っぽい勇気に裏打ちされた無思慮な、傲慢な、嫉妬深い未熟な奴等と考えていた。これこそ以前の Fleming の全体像を彷彿させるものであり、

むしろこの場合、彼がいかに自己中心的であったかを示す以外の何ものでもない。このようなキャンプで過ごすことを好まなかった彼も、今仲間の中で生活することが、以前に比べてはるかに容易になったことを自覚する。

第15章では、彼の自尊心は完全に回復する。彼は判断の眼に映るものを積極的に自己のものにしようとし、勇気を阻害するいかなるものも寄せつけなくなる。今彼は一人前の男となった。

Besides, a faith in himself had secretly blossomed. There was a little flower of confidence growing within him. He was now a man of experience. He had been out among the dragons, he said, and he assured himself that they were not so hideous as he had imagined them⁵⁸⁾.

彼の過去の経験は、次の戦闘にあって慎重に自己を見つめるのに役立つだろう。以前自己喪失をもたらしたドラゴン達を、本来の冷静な眼で眺めることの出来る確信を得る。彼等は想像していた以上に恐ろしいものではないと思うのであり、さらに「神々に選ばれ偉大な人間になるように運命づけられた彼を、ドラゴン達は殺すことが出来ようか⁵⁹⁾」と自問するに至る。

Lafrance によれば⁶⁰⁾、この一節の解釈の問題は、これに続く部分の解釈の問題となるとし、この時点で、Fleming の考えることの中には多くの真実が含まれるとしている。Fleming が自己を「経験を経た人間」と信ずる時、彼の態度は正しいし、作者が構築した心理的行動パターンに沿って進む時、「ドラゴン達は想像していたより恐ろしくない」と認識すること、また「彼等は彼を殺すことが出来ようか」と考えるのは、彼の経験を通して学んだ教訓なのであるから。このように、彼の強靱な心は、ドラゴン達に挑戦し、彼等から逃れるか征服するかの二者択一を正しく結論する。これらの思考のすべては真実であり、賢明である。そして次の戦闘に素早く立ち向かう基盤の一部を、いち早く形造るのである。

第17章では、昨日と今日の彼の心理的な相違が、対照的に捉えられている。

Yesterday he had fought and had fled rapidly. There had been many adventures. For to-day he felt that he had earned opportunities for contemplative repose⁶¹⁾.

Yesterday, when he had imagined the universe to be against him, he had hated it, little gods and big gods; to-day he hated the army of the foe with the same great hatred⁶²⁾.

前者では昨日の経験が、彼に「静観的な落ち着き」を与えるのであり、後者では、昨日の憎しみの対象が、形而上的な自然であったものが、今日は形而下的な敵に移っている。このことは昨日の冒険の経験が、彼に真実の世界を知覚させるに至ったことを意味しているだろう。

事実、彼は装填し、発射し、罵声をはり上げると、仲間は畏敬の念に打たれる。彼は野蛮人、野獣のごときのものであったし、その宗教を守ろうとする異教徒のように戦うのである。この戦闘で、彼は「山脈とも思われた障害に打ち勝ち」、一方敵は「紙で出来た峰⁶³⁾」のように

倒れていく。

今こそ彼はいわゆるヒーローとなったのである。彼は今までのように恍惚の状態ではなかったのではなく、昨日の経験つまり冒険を通して、現実の真実を冷静に認識することによって勝ち得たヒーローであった。

Lafranceによれば⁵⁸⁾、精神の発展過程のこの時点で、彼は考えるべき多くのことを持っていると言い、この小説が始まって以来始めて謙譲の精神を学びとる立場にあることを指摘する。未知な経験を越えて、これからもいくつかの経験を経なければならぬとしても、賢明な主人公は、今起こったことから自己の真実の姿を知ることが出来る。

第18章では、今起こったことは彼を大人にしたと感じさせ、次のように続く。

New eyes were given to him. And the most startling thing was to learn suddenly that he was very insignificant⁵⁹⁾.

彼は今までとは異なった見る眼を自覚し、それを通して自己は無意味であることを学ぶ。この無意味さの自覚は、今までの虚偽の武勲章を求めた高慢さに気づき、ここで謙譲の精神を学びとったことを意味しないだろうか。このように解釈していくと、第19章の意味も自ずと理解されてくる。彼は「すべてのものを理解したようであり」、彼の心は「機械的ではあるが、しっかりした印象を受け止め、すべてが彼に想像され説明されるようになる⁶⁰⁾」であり、これは新しい眼、つまり謙譲の精神による彼の内面の現実認識を意味している。この認識に立って、彼はこの後の章で人間としての成長をとげていく。

第20章では、彼と中尉との間に「崇高な友情と平等」を感じとるのであり、彼等はお互いしわがれ声で嘯鳴りながら「助け合う⁶¹⁾」のである。このように自己中心的で傲慢であったFlemingが、自己の内面の現実を冷静に見つめることが出来るようになった結果、この恐ろしい戦場で生き残るためには、仲間との連帯が唯一の必要条件であることを学びとるのである。

第21章では、Fleming自身攻撃に際してとった行動を考えると、非常な喜びを感じない訳にはいかない。彼は昨日恐怖におののいて逃走したことを考えると、この喜びは無謀なものでも道理に合わないものでもないものであり、したがってこれは、昨日の冒険を契機に彼が耐えてきた忍耐の賜物であったと理解出来るよう。

最終章では、彼は今戦闘という極悪非道の手段を用いたことに憤りを感じているが、彼の頭は今やっと過去の夢魔から覚めて、自己の存在なり周囲を明確に理解することが出来る。その後で、彼の行動、失敗、参戦などに思いを馳せ、今は過去の思い出から這い出て、あらゆる行動を、自己の力で行うよう努力し始める。彼の一連の思い出を考える時、彼は愉快であったし後悔はなかった。というのは彼の公的な行為が、偉大な輝ける卓越において思い出されるからである。この偉大さと輝ける卓越さを、紫と金色と形容されているのは、この作品の色の多用による効果をいやが上にも高めるものであり、最後に金色の太陽が鉛色の雨雲からさしかか

っているのは、金色によって形容される彼の行為の偉大さが、真の武勲章を受けるに価することを暗示したものであろう。

以上 Fleming に焦点を合わせて、彼の精神の成長過程を辿ってきた。一日目の逃走は、客観的には恐怖と憶病性に由来した行為であったが、死者との出会いによる変化は、彼の内的成長を求める作者の意図的構図であったろう。しかしこの段階では、死者との対峙によってこれまでの逃走という非道の行為に罪意識を感じさせ、短絡的に武勲章を衝動的に求めようとする意欲が見られるが、これは明らかに彼の罪意識の代償的役割しかもっていない。この行為は冒険であることは明らかで、結果的には死を意味するからである。したがって彼の逃走も死の回避、つまり生への一つの方法として自己弁護するのは、この時点では自己の責任の回避としてしか映らないが、これは作者が Fleming の精神の成長における一つのモメントとして設定せざるを得なかった作爲であったろう。その後の彼の行為を見ると、冷静に自己を見つめることが出来るようになったことから始まり、その結果昨日の経験から、無思慮、傲慢、嫉妬、未熟さに気づき、いわゆる「経験を経た人間」となり、敵に挑戦しながら、逃げるか征服するかの二者択一を結論するに至る。この過程で、謙譲さ、仲間との連帯、友情、忍耐を学ぶことによって、彼は真のヒーローとなる。昨日の虚偽の武勲章への妄想が、経験によって開眼する時、真実の武勲章を受けるに価するヒーローとなることを意味している。

注

- 1) R. W. Stallman & L. Gilkes (ed.), *Stephen Crane: Letters* (New York Univ. Press, 1960) p. 125.
- 2) *Ibid.*, p. 87.
- 3) *Ibid.*, p. 310.
- 4) Marston Lafrance, *The Role of Illusion in the Work of Stephen Crane* (Univ. Microfilms, 1965), pp. 318-319.
- 5) *Ibid.*, p. 321.
- 6) R. W. Stallman & L. Gilkes, *op. cit.*, p. 303.
- 7) *Ibid.*, pp. 309-310.
- 8) *Ibid.*, p. 309.
- 9) *The Red Badge of Courage* (Modern Library, 1950), p. 15.
- 10) *Ibid.*, p. 32.
- 11) *Ibid.*, p. 48.
- 12) *Ibid.*, p. 7.
- 13) *Ibid.*, p. 41.
- 14) *Ibid.*, p. 41.
- 15) *Ibid.*, p. 41.
- 16) *Ibid.*, pp. 40-41.
- 17) *Ibid.*, p. 42.
- 18) *Ibid.*, p. 43.
- 19) *Ibid.*, p. 44.
- 20) Thomas A. Gullason (ed.), *Stephen Crane Career* (New York Univ. Press, 1972), "The Cyclical!

- Structure of *The Red Badge of Courage*" by Thomas M. Lorch, p. 353.
- 21) *The Red Badge of Courage*, p. 91.
 - 22) *Ibid.*, p. 91.
 - 23) *Ibid.*, p. 91.
 - 24) Thomas A. Gullason (ed.), *op.*, *cit.*, "Animal Imagery in *The Red Badge of Courage*" by Mordecai and Erin Marcus, p. 346.
 - 25) *The Red Badge of Courage*, pp. 90-91.
 - 26) *Ibid.*, p. 92.
 - 27) *Ibid.*, p. 92.
 - 28) *Ibid.*, p. 92.
 - 29) *Ibid.*, p. 93.
 - 30) Marston Lafrance, *op.*, *cit.*, p. 374.
 - 31) *The Red Badge of Courage*, pp. 95-96.
 - 32) *Ibid.*, pp. 98-100.
 - 33) *Ibid.*, p. 102.
 - 34) *Ibid.*, p. 102.
 - 35) *Ibid.*, p. 102.
 - 36) *Ibid.*, p. 106.
 - 37) *Ibid.*, p. 117.
 - 38) *Ibid.*, p. 121.
 - 39) *Ibid.*, pp. 122-123.
 - 40) *Ibid.*, p. 48.
 - 41) *Ibid.*, p. 50.
 - 42) *Ibid.*, p. 51.
 - 43) *Ibid.*, p. 114.
 - 44) *Ibid.*, p. 144.
 - 45) *Ibid.*, p. 115.
 - 46) *Ibid.*, p. 127.
 - 47) *Ibid.*, p. 130.
 - 48) *Ibid.*, p. 133.
 - 49) *Ibid.*, p. 134.
 - 50) Marston Lafrance, *op.*, *cit.*, p. 393.
 - 51) *The Red Badge of Courage*, p. 164.
 - 52) *Ibid.*, p. 173.
 - 53) *Ibid.*, p. 173.
 - 54) Marston Lafrance, *op.*, *cit.*, p. 400.
 - 55) *The Red Badge of Courage*, p. 188.
 - 56) *Ibid.*, p. 189.
 - 57) *Ibid.*, p. 195.
 - 58) Marston Lafrance, *op.*, *cit.*, p. 407.
 - 59) *The Red Badge of Courage*, p. 202.
 - 60) *Ibid.*, p. 209.
 - 61) *Ibid.*, p. 221.

